

多剤耐性菌に対する併用療法を再考する 司会のことば

¹横浜市立大学附属病院感染制御部、²東京医科大学微生物学講座・東京医科大学病院感染制御部

満田 年宏¹、松本 哲哉²

各種耐性菌の出現と高度耐性化に伴い、抗菌薬療法が限界を迎えている。私達が身近に直面する問題として多剤耐性緑膿菌（MDRP）感染症があるが、単独で有効とされるコリスチンが国内ではまだ市販されておらず、併用療法による治療の選択肢が重要となる。さらに感染性心内膜炎や骨髄炎、深部膿瘍などでは、抗菌薬の臓器移行性が悪いことも一因となって抗菌薬の併用療法が試みられる場合も多い。

実際に抗菌薬を併用する場合、まず直面するのがどの抗菌薬の組合せが適切か、という点である。有効な抗菌薬の組合せについては、これまでにさまざまな検討がなされており、推奨される抗菌薬の候補が挙げられている。ただし、MDRPの場合は菌株間の感受性の差が大きいため、BCプレートを用いた個別の菌の評価が有用とされている。さらに併用する抗菌薬の組合せが決まったとしても、妥当な投与法や副作用の問題などクリアしなければいけない課題も多い。

抗菌薬の併用療法は概念的にはその有効性が高いことが推定されていたとしても、まだしっかりとした理論的裏付けに基づいて行われているとはいえない面もある。そこで本シンポジウムでは多剤耐性菌に対する抗菌薬の併用療法に関して、豊富な経験を有する先生方にそれぞれの立場からご発表を頂き、認識を深める機会となることを期待している。